

# 採 蓮

Siren

第二  
一  
号

No.21

## 「ジャポニズムを通して浮世絵を見る(仮称)」展のための作品調査報告

山根佳奈

本調査は、二〇二〇年夏に開催を予定している展覧会「ジャポニズムを通して浮世絵を見る(仮称)」の準備を目的として行われた。この展覧会は一九世紀末〜二〇世紀初めに活躍した西洋の芸術家が浮世絵に出会った時、何を新しいと感じ、自らの芸術に取り入れようとしたのかをジャポニズムの版画・絵画から辿り、彼らの視点を借りて新たに浮世絵版画の魅力を再発見しようとするものである。

調査では、アメリカ北東部の三つの美術館を訪ねた。時系列に沿って紹介すると、フィラデルフィア美術館、ジマリー美術館、メトロポリタン美術館となる。本稿では、調査先ごとに概要を報告したい。調査期間は、二〇一八年三月七日(水)から一八日(日)にかけての一二日間で、千葉市美術館副館長兼学芸課長田辺昌子・学芸員山根佳奈のほか、木下京子氏(多摩美術大学美術学部教授／フィラデルフィア美術館学芸員)が参加した。いずれも訪問先の担当学芸員の協力を得て、ジャポニズムに分類されている版画作品を中心に、ポスターや印刷物、油彩画等も含めて実見することができた。日本の美術の影響を受けて制作された作品を中心とする調査であったが、フィラデルフィア美術館では、ジャポニズムの代表的作家の一人とされるメアリー・カサット旧蔵の屏風を、メトロポリタン美術館では、同館の誇る浮世絵コレクションから喜多川歌麿の作品などもあわせて調査した。調査作品を数えると七九八件となる。

今回、アメリカでのジャポニズムの受容・展開について、作品を通してあら

ためて考えを深めることができた。そして、アメリカ人作家の目を通したジャポニズム及びアメリカ国内での展開について、また、何をもって日本美術からの影響とするかについても、それぞれ手がかりを得ることができたと思う。なお本調査は、一般財団法人高久国際奨学財団からの研究助成を受けた「版画を通じた東西交流の研究」の一環として実現したものである。報告に先立ち、あらためて謝意を表したい。また、調査先との調整および現地でのサポートを引き受けてくださった木下氏、フィラデルフィア美術館の版画・ドローイング担当学芸員シェリー・ランデル氏、東洋部長フェリス・フィッシャー氏、ジマリー美術館の版画・ドローイング・ヨーロッパ美術担当学芸員クリスティーン・ギヴィスコス氏、メトロポリタン美術館の日本美術担当学芸員ジョン・カーペンター氏とモニカ・ピンチ氏ほか、調査先各機関の惜しめない協力にお礼を申し上げたい。

### ●フィラデルフィア美術館(Philadelphia Museum of Art)

フィラデルフィア美術館はアメリカ独立から一〇〇周年を記念して同地で万国博覧会が開催された一八七六年に設立された。東部では、ニューヨークのメトロポリタン美術館、ボストン美術館に次ぐ規模で、古典から現代までコレクションの分野は幅広く、浮世絵四〇〇〇点以上を含む日本美術を所蔵している。

このでの主目的は、フィラデルフィア生まれの画家メアリー・カサット (Mary Cassatt 1844-1926) の作品であった。カサットはペンシルバニア州の裕福な家庭に生まれ、ペンシルバニア美術大学(フィラデルフィア)で美術を学び始めたのちパリへ渡り、ドガとの交流などがよく知られている印象派の画家である。フィラデルフィア美術館には、カサットの作品が多く収蔵されているが、日本美術に魅せられた画家が他の印象派の画家たちに先立ち、いち早く購入した浮世絵版画や屏風などの旧蔵品のコレクションでも注目される。また、今回調査した作品の中には、カサットの親族による寄贈作品も複数含まれていた。

カサットは一九〇〇年前後より母と子を主題として、対象を親密な眼差しで描いたことが知られ、本調査でも、主に同主題の版画作品六八点あまりを見ることができた。浮世絵版画にしばしば登場する母と幼子の姿からの影響が指摘される同主題の作品についての調査であったが、予想外に興味深かったのは、カサットが版画用紙として古い書籍等の風合いのある紙を再利用していたことである。このことについては、同館での先行研究も踏まえてもう少し調べてみたい。

次に、アーサー・ウェスリー・ダウ (Arthur Wesley Dow 1857-1922) が、アメリカのジャポニスムを語る上で欠かせない人物として挙げられた。マサチューセッツ州東部の小さな街イプスウィッチで生まれ、絵画、版画、写真の分野で活躍したが、特に北斎作品との出会いを通じて日本美術の原理に基礎をおいた美術教育を確立し、アメリカでの普及と実践につとめたことで知られる教育者でもある。重要な作家として指摘されたものの、ここで実見できたのは一九〇八年に刊行された本一冊のみであった。ダウについては、次の調査先ジマール美術館で版画作品を複数見ることがなかった。

フィラデルフィアと次のジマールでそれぞれまとまった数の作品を目にする

ことになる版画家フェリックス・ヒュオ (Félix Hilaire Butot 1847-1898) は、ジョルジュ・ビゴーに影響を与えた日本美術愛好家である。一つの作品に複数の版を重ねるなど、実験的で幻想的なエッチング作品で知られており、今回の調査でも、いくつかの作品に日本的なモチーフが使われていることが確認された。

同じく両館で複数所蔵されていたのが、スウェーデンに生まれ、移民として渡ったアメリカで活動したブルーア・ジュリアス・オルソン・ノードフェルト (Brof Julius Olsson Nordfeldt 1878-1955) の木版画である。一九〇六年の制作とされる一連の版画作品には、浮世絵版画に特徴的な構図や木目の表情を生かす工夫が見られた(ジマール美術館では、より直接的な影響が感じられる波や雨のモチーフが見られた)。また、二〇世紀初頭にマサチューセッツの版画家コミュニティ「Provincetown Printers」にノードフェルトがもたらしたとされる「white-line woodcut」(糊目止めをして白い線を残す技法)は、浮世絵版画からの影響(ただし、この技法では色別の版木は作らず、一枚の版木で多色表現を目指す)が指摘されているが、本調査でも該当する作品を複数見ることができた。

千葉市美術館が近代版画の作家として収集対象とし、「版画を通じた東西交流の研究」の一環として調査と展覧会企画を進めている「チエコにおけるジャポニスム(仮称)」でも取り上げられる予定の作家エミール・オリリック (Emil Orlik 1870-1932) の作品四点を調査した他、エドゥアール・マネ (Edouard Manet 1832-1883)、「ジェームズ・ティソン (James Tissot 1836-1902)」、「エドゥアール・ヴェイヤール (Edouard Vuillard 1868-1940)」、「フェリックス・ヴァロトン (Felix Edouard Vallotton 1865-1925)」、「ジェームズ・アボット・マクニール・ホイットスラー (James Abbott McNeill Whistler 1834-1903) などの版画作品を中心に実見した。特にホイットスラーについては、フィラデルフィア美術館、ジマ

ーリ美術館ともまとまった数の作品を有しており、調査対象となったものは合わせて一六点上る。繰り返し描かれた構図も多く、典型的なジャポニスムの特徴を示す橋のモチーフを中心に調査を進めた。

### ●ジマーリ美術館(The Zimmerli Art Museum at Rutgers University)

ジマーリ美術館は、ニュージャージー州ニューブランズウィックにあるラトガース大学付属の施設である。同大学は植民地時代からの古い歴史を持つ名門大学であり、幕末から明治初頭にかけて、松方幸次郎はじめ多くの留学生が学び、日本との繋がりも深い。一九六六年に前身となるラトガース大学アートギャラリーが作られ、一九八三年にThe Jane Voorhies Zimmerli Art Museumが設立された。六万点の収蔵作品は多岐にわたるが、アメリカとヨーロッパの美術、ロシアとソビエトのノン・コンフォルミスト美術を中心に、中でも一九世紀フランスの版画・ドローイング・稀覯本の分野が充実しているとされる。ジャポニスム関係の作品も多く所蔵しており、これまでも研究に基づき関連する展覧会を開催してきた実績がある。中でもフェリックス・ピュオ、アンリ・ゲラルド(Henri Guérard 1846-1897)、アンリ・リヴィエール(Henri Riviere 1864-1951)の作品については、まとまった規模の所蔵を誇る。今回の調査でもこれらの作家については多く目にする事ができた。

ジマーリ美術館のコレクションは、約三〇年前に「青い目の浮世絵師たち アメリカのジャポニスム展」(会期一九九〇年二月二〇日―一九九一年二月二〇日)世田谷美術館として日本で紹介されている。水彩・版画を中心に一四〇点余りで構成されたものであった。今回の調査では、同展覧会の図録を参考にしつつ、クリスティーン・ギヴィスコース氏の提案を受けて調査を進めた。

フィラデルフィア美術館では本一冊のみの調査となったアーサー・ウェスリ

ー・ダウについては、ここでは制作年代の異なる八点の作品(木版画五点、ポスター三点)を見ることができた。アメリカの美術教育の分野で語られることの多いダウだが、著書『構図(Composition)』(一九九九年)に著されたその教育メソッドは、ボストン美術館のフェノロサの下で過ごした経験に負うところが大きいとされる。同書はアメリカを中心に多くの読者を得たことにより、ジャポニスムの裾野を広げることになった。ダウは著書のみならずその作品によっても、アメリカの作家や美術学生たちの間に日本美術や多色摺木版画に対する興味をもたらした。ダウの木版画ではマサチューセッツの風景がシンプルな構図と色使いで描かれ、同じ版木で色を変えて摺るなど、多色摺木版画の技法的な特徴そのものが表現に生かされている。自身、日本美術のコレクターでもあり、一九〇三年に来日して美術品を収集したとされ、没後のコレクションの売り立て目録(The American Art Association, 1923: New York)には、浮世絵版画や版本から版木に至るまでが、日本や中国の工芸品とともに数多くリストアップされている。

次に、三六件の作品にあたったヘレン・ハイド(Helen Hyde 1868-1919)を挙げる。うち一件は、千葉市美術館所蔵作品との関連という面からも興味深いと思われる作品『Songs of the Japanese Children』(一九〇一年)で、未刊行の歌集のためのドローイング集である。最初の日本滞在(一八九九―一九〇二)の成果の一つといえるだろう。後の木版画作品との関連については、今後調査を進めたい。あわせて、ハイド同様に来日経験があり、同じく所蔵作家であるバーサ・ラム(Bertha Lum 1869-1954)の作品一五点も見ることができた。

五〇点(うち一二点は印刷物)のまとまった数の作品を目にすることができたジュール・シャデル(Jules Chadel 1870-1942)は、アンリ・リヴィエールなどととも「日本美術友の会(Les Amis de l'Art Japonais)」の会員として活動したフランスの画家である。浮世絵版画からの影響は構図やモチーフだけでなく

く、彫りや摺りの作業を含む木版画技法への取り組みが指摘されている。

さらに多い数の作品を目にしたのは、パリで活動した挿絵画家アンリ・ソム (Henry Somn 1844-1907) の版画である。流行のファッションに身を包んだ女性とともに日本的なモチーフを配した作品のほか、北斎作品など日本の版本や印刷物からそのまま転用したと思われるものも見られた。ジャポニスムの画家として日本での知名度は必ずしも高くはないかもしれないが、この時代の多くの画家たちに日本美術がどのように取り入れられたのかをたどる上では興味深い作品といえるだろう。

フィラデルフィアに続き、ジマリー美術館でも一七点を調査したメアリー・カサットの版画は、いずれもプライベートな空間でモデルをつとめた女性や子どもたちとの親密な距離が感じられる小品であった。

他、ジャポニスム研究には欠かすことのできないサミュエル・ビング編『芸術の日本 (Le Japon Artistique)』(一八八八—一八八九刊行分)、ルイ・ゴンズ『日本美術 (L'Art Japonais)』(一八八三年)などの刊行物についても調査を進めた。

#### ●メトロポリタン美術館 (The Metropolitan Museum of Art)

メトロポリタン美術館は一八七〇年に開館したニューヨーク最大の美術館で、古代エジプト美術から現代美術まで幅広いコレクションを有しており、ルーブル美術館に次ぐ入場者数を誇る。私立の美術館であり、「ペイ・アズ・ユー・ウィッシュユ」というポリシーのもと、これまではユニークな入館料設定であったが、本調査チームが訪ねた二〇一八年三月より一部対象を除き固定の金額が設定された。

ここでは二八点の浮世絵版画を調査した。その内訳は、喜多川歌麿八点、鳥居清長六点、鈴木春信五点、葛飾北斎五点、歌川広重三点、鳥文斎栄一点で

ある。「自在な視点」「木の間越しの景色」「母と子の姿」「さりげない日常を描く」などといった、今回の展覧会のキーワードに沿ってリクエストした作品が次々と披露された。調査チームは先行する二つの調査先で目にした膨大な数の作品を振り返りながら、これらのキーワードについてあらためて考えることとなった。

今回の調査では、調査チームからのリクエストに加えて、各館の所蔵作品の中から西洋美術の歴史の中で「ジャポニスム」と捉えられてきた(彼ら自身からの歴史の中で捉えてきた)作品を各館でリストアップしていただいたのであるが、調査の過程で「これもジャポニスムなのか？」と戸惑う場面もあった。日本美術の影響によって現れたものについては、実際のところ、それ以前の美術史はもとより文化的背景を熟知していなければ判断は難しい。これも本調査を通して実感したことであり、今後の調査研究においても心にとめておきたいと思う。

# ‘Report on a Research Survey of Artworks for the Exhibition “Ukiyo-e Viewed through Japonism (tentative title)”.’

Yamane Kana

This research survey was conducted with the aim of preparing for an exhibition to be held in the summer of 2020, “Ukiyo-e Viewed through Japonism (tentative title)”. This exhibition will trace back through Japonism prints and paintings from when Western artists, active from the late 19th century into the early 20th century, came across Ukiyo-e, to find what they sensed as new, and what they thought to incorporate in their own art. By borrowing their viewpoints, the exhibition will also attempt to newly rediscover the fascination of Ukiyo-e prints.

For the research survey we visited three art museums in North-East USA. These were, in order of visiting, Philadelphia Museum of Art, Zimmerli Art Museum and the Metropolitan Museum of Art. This paper intends to report the findings at each of the research locations. The duration of the research survey was 12 days from Wednesday, March 7th 2018 through Sunday, 18th, and was attended by Chiba City Museum of Art curators Tanabe Masako and Yamane Kana, as well as Kinoshita Kyoko (Professor, Tama Art University Faculty of Art and Design; Curator, Philadelphia Museum of Art). At each place of visit we received cooperation from the curator in charge, and were able to inspect, for the most part, prints classified as Japonism, but also posters, publications and oil paintings etc. The survey centered on works produced through influence from Japanese art; however, at the Philadelphia Museum of Art we examined a folding screen that once belonged to a leading Japonism artist, Mary Cassatt, and, at the Metropolitan Museum of Art, an additional 28 pieces of artwork by Torii Kiyonaga from the Ukiyo-e collection that the museum boasts. The number of works surveyed numbered 798.

From this research survey, we were able to enhance our understanding of the reception and development of Japonism in America through the artworks. We believe we found clues to the Japonism viewed by American artists, and to its development in America.

Finally, this research survey was carried out as part of the “Research of East-West Exchange found in Prints” that has received research funding from the Takaku Foundation.

(Translated by Barbara Cross)

千葉市美術館研究紀要  
採蓮 第二一号

二〇一九年三月三〇日発行

編集・発行 | 財団法人千葉市教育振興財団  
千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央三丁目一〇番八

電話 | 〇四三―二三―二三二一(代)

翻訳協力 | バーバラ・クロス

制作 | e r A

Bulletin of Chiba City Museum of Art  
Siren No.21

March 30, 2019

Edited and Published by

**Chiba City Museum of Art**

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN

Phone. 043-221-2311

Translated by

**Barbara Cross**

Produced by

**erA**

ISSN 1343-148X